

岩手県大槌町の中心部にある「福幸きらり商店街」。東日本大震災の津波で店を流された約40業者でつくる仮設商店街だ。そこで学生服販売店を営み、理事長も務める山崎繁さん(68)は、ある決意を固めていた。

仮設商店街の撤去費への国の補助は2019年3月末まで。入居店舗はそれまでに退去を迫られる。自前の店舗を設けるには多額の出費が必要になるため、山崎さんは1年前、廃業に心が傾き掛けていたが、最近になって考えが変わったという。



仮設商店街を退去後も出店する決意を固めた山崎さん

## 時の刻みは ~震災6年 岩手・大槌から~

### ③ 決意

# 廃業を翻意 店再建へ

「一時は店を畳もうと本気で考えたけど、ちょっとと思うところがあって。新しい店を建て、もう一踏ん張りしなきゃ」

山崎さんは被災で行方不明になった母親と妻を捜し歩いた時、服がぼろぼろで寒さに震える子どもの姿を

目の当たりにした。ちゃんとした服を着させてやりたい。そんな思いから仮設商店街で再起した。

仮設商店街は当初、観光客らが殺到し、どの店も潤ったが、開業から3年を境に来店者は減少。今はピーク時の半分に減った。仮設商店街はテナント料が無料だから何とか経営

できている。「運営すら苦しいのに自前の店舗再建なんて無理だ」と山崎さんは考えていた。

町内の学生服販売店は津波被害で多くがつぶれ、山崎さんの店を含めて2店しかない。町外の同業者はどこも手いっぱい。「学生服を扱う店がないと子どもたちが困る」。仮設への出店を決めた時に似た思いで、店の再建を決めた。

出店費用には手持ちの資産を充て、行政の補助も活用する。1千万〜2千万円の不足分は借り入れで賄うつもりだ。震災前にあった町内76店舗のうち20〜30店舗は同じやり方で出店すると聞いている。今春にはいくつか新しい店ができる。

ただ、理事長として心配なこともある。再建したくても、めどが立たない業者が少なくないことだ。

同じ商店街で写真店を営む巖岩彦さん(48)もその一人。町中心部にあった店が津波で流された。自宅兼店舗を建てたいと考えているが、土地も資金繰りも決まっていない。

町内唯一の写真店として、幼稚園

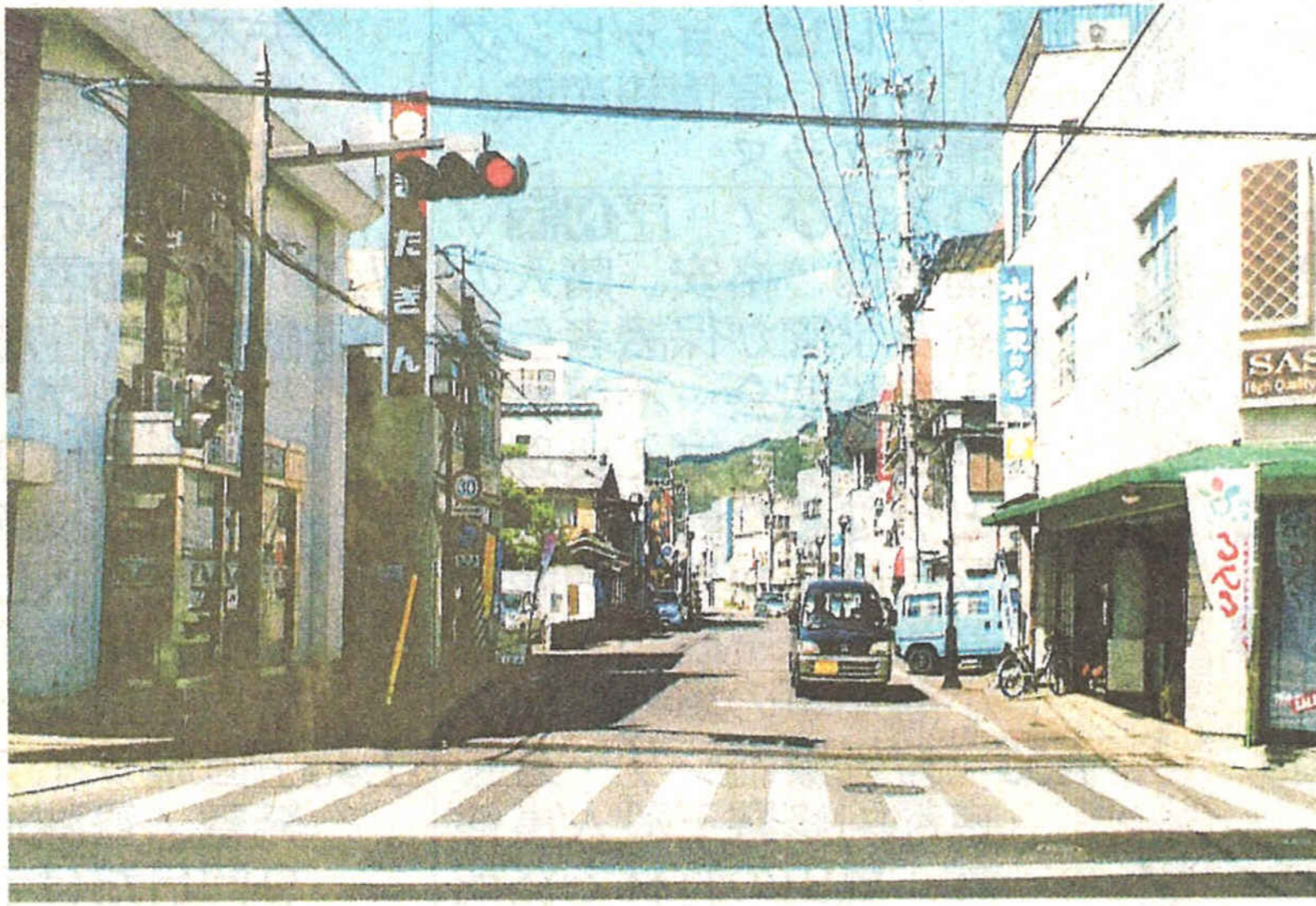
と小中高校から行事の撮影や卒業アルバム製作を請け負っている。巖岩さんは「住民のニーズに応えるためにも何とか店を続けたい。条件に合う物件や補助について情報がほしい」と話す。

被災地では年数回、ご当地グルメを集めた復興グルメ大会が開かれている。国際医療ボランティアAMD A(岡山市)が軌道に乗せ、現在は協賛団体として支える復興支援イベント。被災商店街の交流が目的だ。「被災地の商店街は今が正念場だ。難局を乗り切るため連携しなければ」。宮城県気仙沼市の仮設商店街「気仙沼復興商店街」副理事長の坂本正人さん(60)は言う。グルメ大会の運営に携わり、AMD A参与も務める。

気仙沼市では5月に新たな商店街ができ、商店の再建が進む見込み。しかし、現在の商店街にある53店のうち20店は大槌町の仮設商店街と同様、廃業か出店か決めかねているという。

今年26日、14回目となるグルメ大会が宮城県南三陸町で開かれる。坂本さんは「交流を通して互いのノウハウを共有し、意欲がある商店の再建に役立てたい」と考えている。

(秋山昌三)



東日本大震災以前の岩手県大槌町の商店街(上)。被災後に設けられた仮設の「福幸きらり商店街」では夏祭りも開かれ、しばらくは多くの人でにぎわっていた(下、2012年7月)